中世から近代の辞書に見る字音の消長
―「言」―

黒沢晶子（東北文教大学）
akuros9638@gmail.com

【要約】
本稿では「言」という漢字の主な字音が室町時代の「ごん」から現代の「げん」へと変化していった過程を見ていく。室町時代、「発言」は「ほつごん」、「言下」は「ごんか」と読まれていた。字音が変化した字音語を各時代の辞書で調べると、近代に入ってから「げん」が使われるようになったものと室町期に両形現われていたものとがある。「言」字音語は、室町時代の『落葉集』では「ごん」と読む語が 64.7%、現代の BCCWJ では「げん」と読む語が 80.9%を占めており、主な字音が替わったことがわかる。また、BCCWJ の「言」字音語のうち『日本国語大辞典』の初出例が明治以降の言葉を見ると、36 語中 35 語が「げん」と読むものだった。「証言」「提言」「言動」等の近代語が西欧語から翻訳される際、造語によって「げん」と読む語が増加したと言うことができよう。このように、「言」は、古くから伝わる言葉が一部新しい字音で読まれ始める段階と新しく作られた言葉が新しい字音で読まれる段階を経て、字音「げん」が増え、定着していったと考えられる。だが、その過程で、一旦「げん」と読まれながら、現代語に残ったのは「ごん」である字音語もあり、字音変化の「綱引き」があったことが認められる。

1．はじめに
本稿では、黒沢（2020）「打」、黒沢（2021）「眠」、黒沢（2022）「物」に続いて、「言」という漢字の字音が変化していった過程をたどってみたい。「言」という字の字音として、まず頭に浮かぶのは、おそらく「げん」なのではないだろうか。

「言」は現代語でも「言語道断」のように「ごん」と読む言葉があり、決して「ごん」という字音がなくなったわけではない。だが、室町時代と現代を比べると、後述のように、主な字音が「ごん」から「げん」に替わっていることがわかる。その主な字音の交替をここでは変化と呼びたい。

「ごん」は呉音、「げん」は漢音である。呉音のほうが日本に渡来した時期が早い。「中」や「本」「国」のように呉音と漢音が同音である漢字もあるが、異なる漢字も多い。異なる例を表 1 に示す。

一覧すると、2 種類の字音のうち、どちらか一方がもう一方よりよく使われるといった直感の働く字が多いのではないだろうか。例えば、4 番の「物」なら「ぶつ」である。「物」には「食物」の「もつ」、「動物」の「ぶつ」という字音があるが、現代語では「ぶつ」のほうが多くの熟語に使われる（黒沢 2022）。現代語では「ぶつ」優勢だが、室町時代には「もつ」が主な字音だった。このように、よく使われる字音は、しばしば時代によって変化する。では、本稿で取り上げる 8 番の「言」という字はどうだろうか。

表 1 : 呉音・漢音の例

	字	呉音	漢音		字	呉音	漢音		字	呉音	漢音
1	行	ぎょう	こう	5	建	こん	けん	9	大	だい	たい
2	力	りき	りょく	6	明	みょう	めい	10	重	じゅう	ちょう
3	文	もん	ぶん	7	工	く	こう	11	無	む	ぶ
4	物	もつ	ぶつ	8	言	ごん	げん	12	上	じょう	しょう

図 1 : 発言　ほつごん
室町中期『文明本節用集』

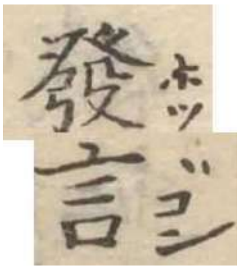


図 2 : 発言　ほつごん
1597『易林本節用集』

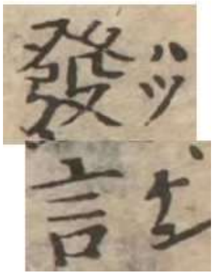


図 3 : 発言　はつげん
1597『易林本節用集』

たとえば「発言」を漢字だけで見たら、現代の私たちは「はつげん」と読むだろう。しかし、室町時代には「発言」は「ほつごん」と読まれていたことが、室町時代中期に作られた『文明本節用集（雑字類書）』と呼ばれる国語辞典を見るとわかる（図 1）。右側に書かれているのがこの言葉の字音、左側には漢字ごとの別の字音「はつ」と「げん」、そして、漢字ごとの訓読みが「をこる」「いふ」のように書かれている。

図 2 と図 3 の画像は、1597 年に出た『易林本節用集』のものである。この辞書では、「ほつごん」だけでなく、「はつげん」も見出し語となっている。これを見ると、2 種類の読みが並行して行われていたようである。では、これ以降、「発言」は「はつげん」に移行したのだろうか。（3.3b 参照）

同じ辞書にやはり二通りの読みが載っている例を図 4 と図 5 に挙げる。図 2・図 3 と同じ『易林本節用集』の「言語（ごんご）」と「言語（げんぎょ）」である。

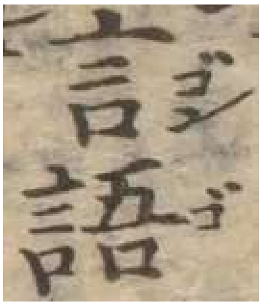
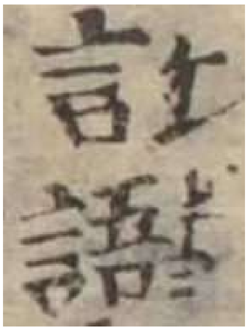


図 4　言語　ごんご
1597『易林本節用集』



ケン　ギヨ

図 5 : 言語　げんぎょ
1597『易林本節用集』

今、私たちが「げんご」と読む言葉は、室町時代は「ごんご」あるいは「げんぎょ」だった。では、「げんご」は、いつごろ現れたのだろうか（3.5b 参照)。「言」の字音はどう変化していったのか。「物」の字音の変化との共通点・相違点は何か。それらのことを知るために、「言」を含む字音語について、各時代の辞書を調べてみた。

２．研究課題および調査対象の辞書

研究課題は、次の三つである。

(1)　いつごろ「言」の字音が変化したのか。

(2)　変化の段階が二つあるか、三つあるか

(3)　室町時代の「ごん」から現代の「げん」へという主な字音の変化は、どのようにして起きたのか。

研究課題(1)については、室町時代から大正時代にかけての辞書の見出し語にどちらの読みが出ているかを見ていく。研究課題(2)については、室町時代は『落葉集』索引、現代は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を NLB[1]というオンライン検索システムを用いて、「ごん」と「げん」の勢力を比べた。また、『日本国語大辞典』(以下『日国』) で初出例や語誌を参照し、「遺言」と「言語」については、『明治文学全集』(筑摩書房、全 99 巻) Japan Knowledge 版の全文検索によってルビ付きの用例を検索した。

表 2 が調査した辞書の一覧で、国語辞書、漢字辞書、対訳辞書が含まれる。合わせて 12 の辞書中、近代のものが 7 種である。電子版と索引および影印本を見た。

表 2 :「言」字音語の読み調査対象の辞書

	種類	辞書名	写本 刊本 活版	西暦	和暦	使用した 電子化資料の 所蔵
1	国語	文明本節用集/雑字類書	写	―	室町中期	国会図書館
2	国語	易林本節用集	刊	1597	慶長 2 刊	国文学研究資料館
3	漢字	落葉集	刊	1598	慶長 3 刊	国文学研究資料館 学術情報リポジトリ
4	対訳	日葡辞書	活	1603-04	慶長 8-9 刊	――
5	国語	和漢音釈 書言字考 合類大節用集	刊	1717	享保 2 刊	早稲田大学
6	国語	江戸大節用海内蔵 ｶｲﾀﾞｲｸﾞﾗ	刊	1834 増補、1863 補刻	天保 4 増補 文久 3 補刻	国文学研究資料館
7	対訳	和英語林集成　第 3 版	活	1886	明治 19 刊	明治学院大学
8	対訳	漢英対照いろは辞典	活	1888	明治 21 刊	国会図書館
9	国語	言海	活	1889-91	明治 22-24 刊	国会図書館

[1] NLB は、動詞や名詞などの共起関係や文法的ふるまいを調べられるのが最大の特徴だが、本調査では、現代の「言」字音語を抽出する目的で使用した。

10	対訳	和英大辞典（ﾌﾞﾘﾝｸﾘｰ）	活	1896	明治 29 刊	国会図書館
11	対訳	日台大辞典	活	1907	明治 40 刊	国会図書館
12	国語	大日本国語辞典	活	1915-19	大正 4 刊	国会図書館

辞書画像は、辞書名欄・所蔵欄の情報、和暦等によって検索することができる。

３.「言」の字音調査結果と考察

３.１「言」の字音を調査した見出し語等

表 3 に示すのは、「言」を含む見出し語が『落葉集』と『日葡辞書』の両方、ないしは、そのどちらかにあって、かつ『明鏡国語辞典』第三版（以下、明鏡）にも見出し語、ないしその他の読みとして載っているという条件を満たす字音語で、合計 22 語ある。これは室町時代に存在し、現代語としても辞書に掲載されているということである。現代語の読みで、「げん」11 語、「ごん」5 語、「ごん・げん」6 語である。この 22 語を字音の変化を調べるための検索語とした。

調査結果として、まず同じ読みを維持した熟語が 9 語あった。「言上：ごんじょう」「大納言：だいなごん」「伝言：でんごん」の 3 語が「ごん」、「広言・荒言[2]：こうげん」「讒言：ざんげん」「忠言：ちゅうげん」「万言：まんげん」「不言：ふげん」「片言：へんげん」の 6 語が「げん」と読むものである。

表 3：検索語（読みは現代語）22 語　 ゴシックかな：ごん、　ゴシック数字：変化なしの語

	見出し語	読み		見出し語	読み		見出し語	読み
1	一言	いち**ごん**・いちげん	9	言説	げんせつ	**17**	万言	まんげん
2	虚言	きょ**ごん**・きょげん	**10**	讒言	ざんげん	**18**	不言	ふげん
3	広言／荒言	こうげん	11	誓言	せい**ごん**・せいげん	**19**	片言	へんげん
4	言語	げんご・**ごん**ご	**12**	大納言	だいな**ごん**			
5	言	**ごん**・げん	**13**	忠言	ちゅうげん	20	発言	はつげん
6	言下	げんか	14	重言	じゅうごん・じゅうげん	21	名言	めいげん
7	言辞	げんじ	**15**	伝言	でん**ごん**	22	遺言	ゆい**ごん**・い**ごん**
8	言上	**ごん**じょう	16	二言	に**ごん**			

３.２「言」の字音が変化した語群

[2] 『日国』では、「広言」と「荒言」は同一の見出し語になっている。語誌によれば、ともに漢籍にはないところから、この語の成立は和語「あら（き）ことば」に漢字「荒」「言」を当て、音読したことによるものと推測される。辞書調査では、どちらの表記でも同じ語とした。

次に、「言」の字音が変化した語群を表 4 に示す。

「げん」の字音が変化した見出し語は 13 語ある。現代の『明鏡国語辞典』第 3 版と室町時代の字音を反映した『落葉集』で、どう読まれていたかを表にした。(「字音語」の欄がゴシック体の語は、このあと、変化の例として詳しく見ていくもの)

表 4 :「言」の字音が変化した語群　13 語　　(数字は表番号)

明鏡	落葉集	字音語	表		明鏡	落葉集	字音語	表
ごん・げん	**ごん**	一言			げん	**ごん**	**言下**	7
		虚言	11				**言辞**	6
	ごんご・げんぎょ	**言語**	12				言説	
							発言	8
	ごん	言					名言	
		誓言			**ごん**	げん	**二言**	10
		重言			ゆい**ごん**・い**ごん**	ゆい**ごん**	**遺言**	9

『落葉集』では、「言語(げんぎょ)」と「二言(にげん)」以外は「ごん」で、**「ごん」が優勢だった**ことがわかる。変化は、表左側のように、「ごん」から「ごん・げん」へが 5 語、また、表右側のように、「ごん」から「げん」へが 5 語、「げん」から「ごん」へが 1 語ある。それ以外に、「ごんご・げんぎょ」から「げんご」という混成の形ができたもの、そして、「ゆいごん」に「いごん」が加わったものがある。全体としては、**「ごん」から「げん」へ**、あるいは**「ごん」から「ごん・げん」へ**という流れになっていると言える。

表 5 :「言」の字音が変化した 13 語 :『NHK 発音アクセント新辞典』の読み

明鏡	NHK	字音語		明鏡・NHK	字音語
ごん・げん	ごん・げん	一言		げん	言下
	げん	虚言			言辞
	ごん・げん	言語			言説
	げん	言			発言
	NA	誓言			名言
	げん	重言		ごん	二言
					遺言

現代語の読みの中には、『明鏡』には「ごん・げん」の両方載っているけれども、『NHK 発音アクセント新辞典』(以下、NHK)では「げん」しか見出し語になっていないものがある(表 5、ゴシックで表示)。「虚言(きょげん)」「言(げん)」「重言(じゅうげん)」である。この 3 語は、現代語としては「げん」のほうがより一般的だと言えるだろう。現代語の読みが NHK で「げん」のみとなっているものは 13 語のうち 8 語である。一方、読みが「ごん」だけなのは 2 語で、現代語では、全体に**漢音「げ**

ん」が優勢となっているのがわかる。

13 語の変化のパターンは非常に複雑だが、次にいくつか取り上げて見てみよう。現代語の主な読みとなる「げん」の出現時期によって分類して示す。

３.３　現代語（『明鏡』）が「げん」である字音語

３.３ａ　近代になって「げん」が出現した語

「言辞（げんじ）」は、室町、江戸時代は「ごんじ」だったが、1888 年の辞書に初めて「げんじ」が現れる。そして、そのまま「げんじ」が近代語・現代語の読みとなっていった。これは交替がシンプルではっきりした例である。（表中の赤字：呉音、青字：漢音、紫字：呉音と漢音。以下同じ）

表 6 :「言辞」　ごんじ　→　1888 げんじ

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	易林本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ごん	**NA**	ごん	**NA**	**NA**	ごん

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英 語林集成	漢英対照 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
NA	げん	**NA**	**gen**	げん	げん	げん

表 7 の「言下（げんか）」は、室町、江戸、そして明治になっても「ごんか」と読まれていた。「げんか」が現れるのは、大正時代の『大日本国語辞典』からで、新しい読みが遅く登場した例である。しかし、現代では、「ごんか」がなくなり、「げんか」が残っている。

表 7 :「言下」　ごんか→　1915 ごんか・げんか

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	易林本 節用集	落葉集	日葡 辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ごん	**NA**	ごん	**Gon**	ごん	ごん

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英 語林集成	漢英対照 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
	ごん	ごん	**Gon**	ごん	ごん・げん	げん

３.３ｂ　室町時代の辞書[3]に「げん」が記載されている語

表 8「発言」は、「ほつごん」という呉音同士の組み合わせが室町中期の辞書に見えるが、1597 年の辞書に、早くも漢音同士の「はつげん」が登場し、「ほつごん」と並記されている。（本稿冒頭、図 1～3 参照）

しかし、漢音形が早くに現れたからと言って、呉音から漢音への交替が簡単には起こったわけではない。表 8 に示すように、辞書によって、その後も「ほつごん」を見出し語とするものが繰り返し出てくる。明治になり、両方の読みが並記されたり、「はつげん」だけになったりした後、現代語では「はつげん」で落ち着いている。このように、読み方がなかなか一方に収束しない言葉が「言（げん)）」には見られる。

『日国』で「発言」を見ると、初出は「ほつごん」が仏教書で「はつげん」が古文書である。古くはそうした使い分けがあったわけだが、近代にはその意識は薄れたようで、宗教色のない「発言」にどちらの読みでも『日国』に用例がある（「ほつごん」は末広鉄腸の小説『花間鶯（かかんおう)』、「はつげん」は中江兆民の『一年有半』)。「ほつごん」は 1915 年の辞書まで見出し語に残った。

表 8 :**「発言」**　ほつごん　→　1597「はつげん」と並記

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	易林本 節用集	落葉集	日葡 辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ごん	ごん・げん	ごん	**guen**	ごん	ごん

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英 語林集成	漢英対照 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
GON	げん	ごん	**gon・gen**	げん	ごん・げん	げん

３.４　現代語（『明鏡』）が「ごん」である字音語

３.４ａ　近代になって「げん」が出現した字音語

表 9「遺言」は、室町・江戸期を通じて「**ゆいごん**」という読みで辞書に載っていた。（さらに古い平安時代の『宇津保物語』にも、ひらがなで「ゆいごん」とあるので、古い言葉だと言える。）それが近代になると、「**ゆいげん**」や「**いげん**」という読みでも辞書に出てくるようになる。（「ゆいげん」は、13 世紀の『沙石集』という仏教説話集にふりがな付きで出ている（『日国』用例)。漢音読みの「いげん」は、今回の調査範囲では近代のヘボンの辞書に初めて登場するが、江戸時代の浮世草子（1690）に、かな書きの「いげん」がすでに使われている。また、「**いごん**」は、最も新しく、「遺言」の厳密な意味を担う法律用語[4]として、明治の終わりごろから使われ始めたということだ（『日国』語誌）。こうして、「遺言」の読みには、(4）のように呉音と漢音の 2×2 通りの組み合わせすべてが存在したこと

[3] 正確には「室町時代の日本語を反映した辞書」。これに含まれる辞書の成立・刊行は室町中期～1603。
[4] 2022 年の連絡会議で、「遺物」に関連して、「遺言（いごん)」は法律で使う言葉だとコメントをいただいた。

になる。

表 9 :「**遺言**」　ゆいごん　→　近代　ゆいげん・いげん　→　ゆいごん・いごん

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	易林本 節用集	落葉集	日葡 辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ゆいごん			**yuigon**	ゆいごん	

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英 語林集成	漢英対照 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
YUIGON・ YUIGEN	ゆいごん・ いげん		**Yuigon・ Yuigen**	ゆいごん・ いげん	ゆいごん・ いごん	

（4）　　　　　　　　　中世　　　近世　　　近代　　　現代

ゆい　ごん　呉音　呉音　————————————————————————

ゆい　げん　呉音　漢音　　——————————————————

い　　げん　漢音　漢音　　　　　　——————————

い　　ごん　漢音　呉音　　　　　　　　　　　　　————

この四者が並存した近代の用例を『明治文学全集』（筑摩書房）から拾ってみよう。Japan Knowledge（ジャパンナレッジ）版テキストデータの全文検索で「言語」にルビのついている用例を抽出した。全集に収められた文章の内容は文学・思想・宗教・史論・言論にわたる。

「遺言」はルビのあるもの、ないものを合わせて 364 件で、そのうちルビのあるものが 89 件だった。内訳は、「ゆいごん」が 62 件、「ゆいげん」が 6 件、「いげん」が 15 件、「いごん」が 6 件である。なお、仮名遣いは、「ゆいごん／ゆゐごん」「ゆいげん／ゆゐげん」「いげん／ゐげん」「いごん／ゐごん」のバリエーションをすべて含む。（原文通り引用。ルビを（　）内に示す）

（5）僕が未亡人に代はりて河口の遺言（ゆゐごん）を讀みましょう。（人見一太郎 1895『明治の天下』）

（6）貴所（あんた）は死んだ父（とつ）様の御遺言（おゆいげん）を忘れ、（三遊亭円朝 1876～78『鹽原多助一代記』）

（7）すでに母親の遺言（ゐげん）をも忘れて。（坪内逍遥 1885『新磨妹と背かがみ』）

（8）芳雄トミ両人には藤木家と絶縁候様遺言（いごん）致し置候（人見一太郎 1895『明治の天下』）

（5）と（8）は同一作家の同一作品内での用例である。（5）が会話、（8）が遺言状の追って書きであり、「ゆいごん」と「いごん」の使い分けが表れているようである。

上記のように「ゆいげん」と「いげん」にも使用例があるが、淘汰されて現代語の辞書『明鏡』に

は「ゆいごん」と法律用語としての「いごん」だけが載っている。

3.4 b　室町時代の辞書に「げん」が記載されている語

表 10「二言」は、「武士に二言はない」などと言うため、古い言葉のように感じられるが、室町時代はむしろ漢音で「にげん」と読まれていたようだ。それが 1603 年の『日葡辞書』に呉音の「にごん」が出て来るのである。下記の用例は、ポルトガル式ローマ字とその発音を反映したカナ書きによる。

(9) Nigonto マゥスマイ　(二言と申すまい)

『日葡辞書』には「言」を漢音読みした用例も載っている。

(10) クンシニ niguen ナシ　(君子に二言なし)

どちらも二つの言葉、繰り返して言うことであると語義の説明があり、異音同義語ということになる。

なお、本稿の調査範囲では室町中期の『文明本節用集』の「にげん」のほうが『日葡辞書』の「にごん」より古い例となるが、『日国』には、平安末～鎌倉初期の仏教説話集『康頼宝物集（やすよりほうぶつしゅう）』(1179 頃) に「綸言汗のことし。天子は二言なしと申たり」が「にごん」の用例として挙がっている。そして、「二言」は近代から現代に至るまで、「にごん」のほうが普通に使われている。漢音でなく呉音が生き残った、少数派の例の一つである。

表 10 :「**二言**」　にげん　→　1603 にごん

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	易林本 節用集	落葉集	日葡 辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
財物	げん	**NA**	げん	**gon・gen**	げん	**NA**

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英 語林集成	漢英対照 いろは	言海	和英 大辞典	日台 大辞典	大日本 国語辞典	明鏡国語 辞典
GON	ごん	ごん	**gon**	ごん	ごん・げん	ごん

3.5　現代語（『明鏡』）が「ごん・げん」である字音語

3.5 a　近代になって「げん」が出現した語

表 11「虚言」は、室町、江戸を通じて「きょごん」と読まれてきたが、明治に入り、1888 年の辞書に初めて「きょげん」が現れる。その後、「きょごん」と「きょげん」が並記されるようになって現在に至っている。なお、『NHK 発音アクセント新辞典』は「きょげん」のみ掲げている。

表 11 :「**虚言**」　きょごん　→　1888 きょげん 出現

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	易林本 節用集	落葉集	日葡 辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ごん	ごん	ごん	**gon**	ごん	ごん

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英語林集成	漢英対照いろは	言海	和英大辞典	日台大辞典	大日本国語辞典	明鏡国語辞典
NA	げん	ごん	**gen**	ごん・げん	ごん・げん	ごん・げん

３.５ｂ　室町時代の辞書に「げん」が記載されている語

本節では、字音に変化のあった見出し語のうち、「ごんご ・ げんぎょ → げんご」という変遷をたどった「言語」を取り上げ、やや詳しく見ていきたい。

表 12 の「言語」の読みには、(11) のように、この呉音・漢音の組み合わせが三通り出現する。

(11) ごん　ご	げん　ぎょ	げん　ご
呉音　呉音	漢音　漢音	漢音　呉音

表 12 :「言語」　ごんご・げんぎょ　→　1886 げんご

	室町中期	1597	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本節用集	易林本節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考合類大節用	江戸大節用
	ごんご・げんぎょ			**Gongo・Guenguio**	ごんご	

1886	1888	1889-91	1896	1907	1915-19	2010
ヘボン和英語林集成	漢英対照いろは	言海	和英大辞典	日台大辞典	大日本国語辞典	明鏡国語辞典
GONGO・GENGYO・GENGO	ごんご・げんぎょ・げんご		**Gongo・Gengyo・Gengo**	ごんご・げんぎょ・げんご		ごんご・げんご

呉音同士の「ごんご」と漢音同士の「げんぎょ」の二通りの読みが室町時代の日本語を反映した辞書には載っている。『文明本節用集』(室町中期) では、「げんぎょ」は見出し語として立てられておらず、ただ別の項目の下、「君子は言語を慎みて飲食を節す」という文中に現れるのみである (原文は返り点・送り仮名付きの漢文)。一方、「ごんご」は単独で見出し語になっているだけでなく、「ごん」で始まる見出し語がほかに「言下」「言説」「言論」など 12 語挙げられている。

本稿の冒頭、図 4 と図 5 は、『易林本節用集』(1597) にこの二通りの読みがあったことを示している。だが、この辞書でも「ごんご」が見出し語であるのに対して、「げんぎょ」はそうではなかった。孔子の 10 人の弟子の才能について書かれた「十哲」の記述の中にあるだけである。「ごん」で始まる字音語として「言語」「言説」「言句」「言失」の 4 語が記載されているが、「げん」で始まる字音語のリストはない。当時「ごん」のほうが一般的な読みだったことを窺わせる。また、漢音は漢文を読む

ときに使うことを奨励された字音である。図 5 の「げんぎょ」は孔子の弟子の話なので、漢音で読まれたものだろう。これらのことから、室町時代、「言」は専ら「ごん」と読まれていたと推測される。

さて、漢音と呉音の混交した「げんご」が登場するのは、本稿の調査範囲では 1886 年、ヘボンの『和英語林集成』第三版である[5]。そのときは独立した見出しではなく、「げんぎょ」の見出しのもとに付属的に出ているだけだった。だが、その後、「げんご」が一貫して辞書に載るようになる一方、「げんぎょ」は姿を消していく。

「げんぎょ」でなく「げんご」が一般化したのは、「語」という字は「ご」と読む熟語がほとんどだったためだと言われている（『日国』「言語」語誌)。「語」を「ぎょ」と読む字音語と言えば、「狂言綺語（きょうげんきぎょ)」（道理に合わない言葉と巧みに飾った言葉の意）だが、江戸時代後半からは呉音で「きご」と読まれる例も多くなったという（『日国』語誌)。これも「げんぎょ」同様、「ぎょ」が少数派だったためであろう。

これに関連して、「語」と同じ呉音・漢音を持つ「御」[6]を見ると、「ご」と読む字音語（御飯、御覧、御馳走）だけでなく、「制御」「御者」「御苑」「統御」「御意」のように「ぎょ」と読む字音語が少なからず存在する。「防禦」の代用表記だが「防御」にも「ぎょ」が使われている。もし「語」にも「御」のように「ぎょ」と読む字音語が一定数あれば、「げんぎょ」は現代語でも使われていたかもしれないのである。

「ごんご」「げんぎょ」「げんご」が辞書上にそろった明治時代だが、実際の使用はどのようなものだったのだろうか。その一端を知るために『明治文学全集』（筑摩書房）の「ジャパンナレッジ版」テキストデータの全文検索で「言語」にルビのついている用例を調査した。

漢字で「言語」と書かれた総件数は 1630 に及ぶが、そのうちルビがふられたものは、ごく一部である。字訓ルビ（「ことば」）を除き、字音ルビは、「ごんご」52 件、「げんぎょ」14 件、「げんご」55 件である。それぞれの用例からわかったのは、次のようなことである。

「**ごんご**」は「言語道断」18、「言語に絶ゆ」18、「言語を絶す」9、「言語の外」2、「言語正しく」「言語に及ばず」「言語に勝ふ（たふ)」「言語に尽くし難し」「言語に述べ難し」各 1 のように、慣用句としての使用が主である。これらの慣用句は、古い辞書に掲載されてきたものを引き継いでいると言ってよいだろう。(12）は「言語道断」の用例である。

(12）書（ほん）を讀むことを廢（や）めさするとは言語同斷（ごんごだうだん)、汝（そなた）も文盲ではないか、文盲の癖に娘の學問を妨（さまた）ぐるとは怪（け）しからぬ、(幸田露伴 1891「いさなとり」)

「**げんぎょ**」は「ごんご」のような古くからの慣用句ではなく、主として「記号・伝達体系」としての「言語」(13)、あるいは、集団や個人の話し方（14）という意味で用いられている。

(13）言語（げんぎよ）発明ありてより文字（もんじ）を發明せしまでに　數（す）千年を經（へ）しならん（田口鼎軒 1899～1900「商業史歌」)

(14）お勢が言語（げんぎよ）の粗暴にして（石橋忍月 1887「浮雲の褒貶」)

話し方を評価する文脈での「げんぎょ」は、早く『日国』の初出例（15）にも使われている。

(15）容皃悠美にして、言語（けんきょ）分明也（13C『高野本平家物語』)　　（容皃=容貌）

[5]『日国』の初出例は『広益熟字典』(1874）で、ヘボンの第三版より早い。
[6] 音符はそれぞれ「吾」「午」で異なるが、『韻典網』で『広韻』を確認すると、「語」と「御」の再構音は同一である。

「げんご」も「げんぎょ」同様、記号体系ないし話し方という意味で専ら使われているが、慣用句を少数含んでいる。「言語（げんご）同断」1、「言語（げんご）に絶す」4、「言語（げんご）に盡（つく）し難（がた）く」1 である。このうち、「言語に絶す」は『日国』および『広辞苑』で「ごんご」「げんご」どちらの見出し項目にも記載されているが、「言語同断」は古い読みである「ごんご」だけが載っている。これは、「言語道断」が『文明本節用集』『日葡辞書』『書言字考合類大節用集』『江戸大節用海内蔵』といった主だった辞書に見出し語として取り上げられてきており、「ごんごどうだん」という読みが動かしようもないほど定着していたということを示しているのではないか。「ごんご」は、単独ではなく、「言語道断」という慣用表現の中で現在でも生き残って使われている。

一方、新しい読み「げんご」は、「げんぎょ」が担当していた意味用法だけでなく、「ごんご」のものだった慣用句の一部にまで取って代わろうとしていた（(16)、(17)）とも言えそうであり、「げんご」の勢力が大きくなっていった過程の一側面を垣間見ることができる。

（16）言語同斷（**げんご**どうだん）、ものもいはず、又いはせさうにもない風（ふう）だつた。（泉鏡花 1904～『続紅雪録』）

（17）此時風雨いよ／＼烈しく、電光雷聲又之に加りて、その心細き事殆言語（げんご）に絶す。（斎藤緑雨 1898『熊野紀行』）

４．「言」の字音変化

４.１ いつ「言」の字音が変化したのか　まとめ

一つ目の研究課題の答えは次のようになる。13 語の字音に辞書上「げん」が現れた時期は、明治・大正時代 8 語と室町時代（の日本語を反映した辞書に）5 語とに分かれる（表 13）。

現代語で「ごん」と読む「遺言（ゆいごん）」「二言（にごん）」を別にすると、主な変化は、「ごん」から「げん」への交替あるいは追加だったと言えそうである。表 13 に現代語が「げん」であるか「げん」を含むものをゴシックで表示した。13 語中、11 語が該当する。なお、「言語」は「げんぎょ」の「げん」を「言語 1」、「げんご」の「げん」を「言語 2」として掲載した。「遺言」は明治期に「ゆいげん」「いげん」が現れている。下段の「類例」は詳細を省略するが、やはり二つに分けられる。

表 13 :「言（げん）」が辞書に現れた時期

近代以降に「げん」が現れた語		
字音語	出現	字音
虚言	1888	きょげん
	1907	きょごん・きょげん
言辞	1888	げんじ
言下	1915	げんか
言語 2	1886	GENGO
遺言	1886	YUIGEN
	1888	いげん
類例 : **言**　1907、**言説**　1915、**言**『明鏡』		

中世（室町期）に「げん」が載っている語		
字音語	出現	字音
発言	室町中期	ほつごん
	1597	はつげん
二言	室町中期	にげん
	1603	にごん
言語 1	室町中期	げんぎょ
類例 : **一言**、**誓言**　室町中期、**名言**　1597		

４.２ 室町時代と現代の「言」字音語の呉音・漢音の比率

表 4 に示したように、13 語の変化は、大勢としては「ごん」から「げん」に交替するか、「げん」が加わるというものであった。

ここで、主な字音の変化について、次のような調査をしてみた。室町時代の日本語を反映した『落葉集』の「言」字音語と『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』に含まれる「言」字音語を比べてみると、どうなるだろうか。『落葉集』に載っている 51 語中、「ごん」と読むものが 33 語（64.7%）、「げん」と読むものが 18 語（35.3%）あり、「ごん」が優勢だった。一方、BCCWJ を NLB で検索した結果は、「げん」114 語（80.9%）、「ごん・げん」8 語（5.7%）、「ごん」19 語（13.5%）であり、「げん」が「ごん」に代わり、主たる字音となっていることがわかる（図 6）。

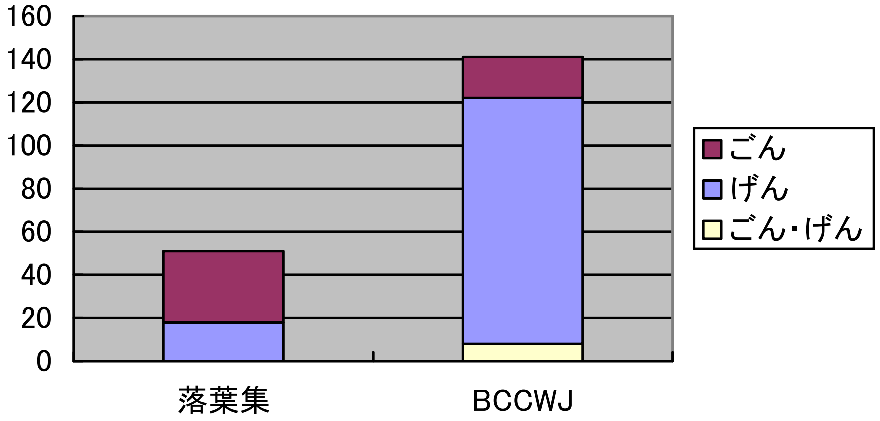


図 6：室町時代と現代の「言」字音語の字音

また、BCCWJ の字音語のうち『日国』の初出例が明治以降の言葉を見ると、36 語中 35 語が「げん」だった。その中には「証言」「提言」「言動」「予言」「預言」「断言」「暴言」「言明」などが含まれる。「ごん」と読むのは、「伝言板」で、古くからある「伝言」（『日国』初出 940 頃）が核となった複合語である。このように、近代になって作られた言葉のほとんどが「げん」と読まれるものだった。

だが、それがすべてではなかった。実は、「げん」になろうとして、なりそこねた字音語もあったのである。それは、「遺言」を「ゆいげん」「いげん」と読んだ『明治文学全集』の用例にとどまらなかった。今回の辞書調査の検索語には条件を満たさず含まれていないが、「無言」や「他言」はその一例である。

「**無言**」は「むごん」と読む『日国』初出例が 1143 年、「むげん」と読む『日国』初出例が 1911 年に見られる。「**他言**」は「たごん」が室町中期、「たげん」が 1925 年である。近代に至り、一旦は使われたこれらの「げん」は、しかし、『明鏡』には掲載されていない。さらに、「**文言**」は「もんごん」が 1423 年初出、「ぶんげん」が 1901-02 年初出である。「ぶんげん」は『明鏡』に載ってはいるが、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』の見出しにはなっておらず、現代語としても古くからある呉音読みの「もんごん」のほうが一般的だと言える。

全体としては、「言」の字音は現代語において漢音「げん」が優勢になったが、その過程は単純に「ごん」が「げん」に交替するというものではなかったわけである。「無言」や「他言」「文言」は、何らかの点で「ごん」が新来の「げん」に凌駕されないだけの力を持っていたということになる。このよ

うに、「言」の字音変化は漢音「げん」が多く使われるようになったと同時に、古い呉音読み「ごん」が「げん」をある意味で排除して生き残る例があること、字音変化の複雑な様相を示している。

５．考察

５.１　変化の２段階は「言（ごん→げん）」にも当てはまるか

研究課題の 2 番目は、変化の段階がどのようなものだったかということである。

字音の変化には、初めに、古くから伝わる言葉が一部新しい字音で読まれ始める段階がある。黒沢（2020）で取り上げた「打（だ）」、黒沢（2021）の「眠（みん）」は、主に江戸時代にそれぞれ「た」「めん」から交替している。黒沢（2022）の「物」（「もつ」から「ぶつ」へ）の変化では、「器物」「遺物」「唐物」「薬物」「代物」などがこの段階があったことを示す例である。本稿では、室町時代の辞書にすでに見える「発言（はつげん）」「言語（げんぎょ）」「一言（いちげん）」「誓言（せいげん）」「名言（めいげん）」があり、辞書調査では「げん」がいつ現れたのかわからないものが多い。そこで『日国』の初出例を比較してみると、「はつげん」「げんぎょ」「いちげん」「せいげん」はそれぞれ「ほつごん」「ごんご」「いちごん」「せいごん」より新しい時期に初出が見られ、「古くから伝わる言葉が新しい字音で読まれ始める」が当てはまると言えるだろう。ただ「名言」は、「めいごん」が 1667 の初出例であるのに対し、「めいげん」は 1171-81 となっており、「ごん」のほうが早いと言える用例が見つかっていない。（18）～（22）は、それぞれ上が辞書、下が『日国』初出時期である。

（18）発言	ほつごん　室町中期	はつげん　1597
	ほつごん　日国 7C 前期	はつげん　日国 1341
（19）言語	ごんご・げんご　室町中期	
	ごんご　日国 760、1257　ごんごどうだん（仏語）1056	げんぎょ　13C 前期
（20）一言	いちごん・いちげん　1597	いちげん　室町中期
	いちごん　日国 820	いちげん　日国　1430
（21）誓言	せいげん　室町中期	せいごん　1597
	せいごん　日国 1111 頃	せいげん　日国　室町中期
（22）名言	めいげん　1597	めいごん　1598『落葉集』
	めいごん　日国　1667 か	めいげん　1177-81『色葉字類抄』

次に、新しく作られた言葉が新しい字音で読まれる段階があり、これがその新しい字音を定着させていく力になると考えられる。黒沢（2022）では、明治以降に造られた「鉱物」「農産物」「博物学」「有機物」「唯物」「物資」などがこの二つ目の段階を示す例だった。本稿では、前節に挙げたように「証言」「提言」「言動」「予言」「預言」「断言」「暴言」「言明」などがこれに当たる。

ところで、「眠」の「めん」から「みん」への移行には、もう一つの段階として、古い時代にあったけれども、継続して辞書に掲載されなかった言葉が、近代になって新しい字音で復活する例が見られた。だが、「物」の「もつ」から「ぶつ」への交替、本稿の「言」の「ごん」から「げん」への交替には、このような例はなかった。従って、「ごん」から「げん」への交替に関しては、三つではなく、二つの段階があったということになる。

５.２ 「ごん」から「げん」へ：主な字音の変化はどのようにして起きたのか

研究課題の 3 番は、主な字音の変化がどのようにして起きたのかということだった。室町時代は「ごん」が中心的だったのが、近代から現代には「げん」が主な字音になっていった。この変化はどのようにして起きたのだろうか。

その答えとしては、まず、近代になって、それまでの「ごん」に加え、あるいは「ごん」に代わって、「げん」と読まれるようになったものがあることが挙げられる（「虚言」「言辞」「言下」「言」「言説」「重言」。表 13 参照）。

また、もうひとつ大きいのは、「物」同様、近代語が英語、ドイツ語などから翻訳される際、造語によって「げん」と読む字音語が増加したということだろう。（「証言」「提言」「言動」「予言」「預言」「断言」「暴言」「言明」など。4.2 参照。）

このようなプロセスを経て、呉音の「ごん」から漢音の「げん」へと代表的な字音が移っていったと言うことができよう。しかし、興味深いのは、近代になって、一旦は「げん」で読まれた語の一部が完全に「げん」に置き換わることなく、「ごん」の読みで現代に生き残っていることである。字音の変化の、それほど単純ではない、綱引きのように引いたり引かれたりする一側面を垣間見ることができる。

６．今後の課題

まず、呉音・漢音・慣用音を含めて、個別に字音が変わっていった時期を特定すること、次に、変化にどのような段階があるかを検証すること、さらに、なぜ／どのように変化したかを考えること、そして、漢音でなく呉音のほうが優勢な字を取り上げることで、字音交替の綱引きに勝つ要因は何か考えることを今後の課題としたい。

参考文献

小川誉子美（2020）『蚕と戦争と日本語－欧米の日本理解はこうして始まった』ひつじ書房

黒沢晶子（2011）「中国語母語話者と入声音－『循環型社会をジゲンし』とは？－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.23, 137-145.

黒沢晶子（2013）「漢字音教材開発－入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか－」『日本語教育方法研究会誌 20-1.

黒沢晶子（2015）「漢字音教材開発－音符の活用－」『日本語教育方法研究会誌』22-1.

黒沢晶子（2016）「漢字音の長音教材－中国語母語話者と非母語話者を対象に」『日本語教育連絡会議論文集』vol.29, 147-157.

黒沢晶子（2017）「漢字音の清濁を何から見分けるか」『日本語教育連絡会議論文集』vol.30, 103-117.

黒沢晶子（2018）「音符は漢字音学習にどのぐらい活かせるか－カ・タ・ナ・ハ・マ行－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.31, 22-34.

黒沢晶子（2019）「常用漢字の字音を音符で見分ける－長さの違いはどこから来たか－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.32, 68-82.

黒沢晶子（2020）「中世から近代への字音の消長－「打」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.33, 48-65.

黒沢晶子（2021）「中世から近代への字音の消長－「眠」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.34, 51-62.

黒沢晶子（2022）「中世から近代への字音の消長－「物」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.35, 121-136.

国語学会編（1976）『国語史資料集－図録と解説－』武蔵野書院
小島幸枝（1978）『耶蘇会板「落葉集」総索引』 笠間書院　国文学研究資料館学術情報リポジトリ
今野真二（2012）『日本語学講座第 5 巻『節用集』研究入門』清文堂
藤堂明保（1957/1980a）『中国語音韻論－その歴史的研究』光生館
藤堂明保（1980b）「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社
中澤信幸（2011）「呉音について」『日本語学』30-3.
中田祝夫（1979）『改訂新版　古本節用集六種研究並びに総合索引』勉誠社
中田祝夫（2006）『改訂新版　文明本節用集研究並びに索引　影印篇・索引篇』勉誠出版
中田祝夫・小林祥次郎（2006）『改訂新版　書言字考節用集研究並びに索引』勉誠出版
沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京堂出版
沼本克明（2014）『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず－字音仮名遣い入門－』汲古書院
橋本進吉（1980）「国語音韻の変遷」『古代国語の音韻に就いて』所収　岩波文庫
森田武（1993）『日葡辞書提要』清文堂出版
山田俊雄（1978）『日本語と辞書』中央公論社
湯沢質幸（1987）「漢字の慣用音」佐藤喜代治編『漢字講座　第 3 巻（漢字と日本語）』明治書院
吉田金彦（1971）「辞書の歴史」阪倉篤義編『講座国語史第 3 巻　語彙史』大修館書店

参考資料

韻典網　2.6 版 </http://ytenx.org/kyonh/>　『広韻』『中原音韻』等の韻書の検索ができる。声母、韻母の再構音一覧を付す。『広韻』のデータは、『宋本　広韻データ』に基づいている。
北原保雄編（2021）『明鏡国語辞典　第三版』大修館書店
国立国語研究所（2021）『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』(BCCWJ) ver. 2021.03 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
国立国語研究所（2022）NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)　<https://nlb.ninjal.ac.jp/>
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ >
国文学研究資料館　新日本古典籍総合データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/ >
小学館国語辞典編集部編（2005-2006）『精選版日本国語大辞典』小学館
日本近代辞書・字書集（2014-16）上智大学学術研究特別推進費重点領域研究 <https://www.joao-roiz.jp/JPDICT/>
宋本広韻データ＜http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/index.html＞
科研費 基盤研究 C「次世代古典文献データベース構築の基礎的研究」（平成 14～16 年度、課題番号：14510494、研究代表者：村越貴代美）による成果の一
土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
藤堂明保編（1980b）『学研漢和大字典』学研
藤堂明保編（2006）『漢字源』学研
『明治文学全集』（1965-1989）筑摩書房 Japan Knowledge 版
森田武編（1995）『邦訳日葡辞書・邦訳日葡辞書索引』岩波書店
Japan Knowledge オンライン辞書・事典検索サイト　https://japanknowledge.com
NHK 放送文化研究所編（2016）『NHK 発音アクセント新辞典』NHK 出版.